プライスラブ

藤三雄月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プライスラブ

【Ｎコード】
Ｎ２１４８Ｓ

【作者名】
藤三雄月

【あらすじ】
九条槍介は身長以外は完璧な美青年だった。女性付き合いになんの不自由も無く遊んでいた彼が十八歳、高校三年生の時、彼女に言われた一言にプライドの高い槍介は激しい怒りを覚え、以降女性に対して侮蔑と偏見の念を持ち続けていた。
そんなある日、付き合いで友人の緒方稜太にキャバクラに連れて行かれる。
そこで一人のキャバ嬢に会い、槍介は忘れかけていた恋愛感情を徐々に取り戻していく。

出会い（前書き）

パソコンで執筆しているため、携帯では見辛いかもしれません。初めての作品なので至らない所も多いと思いますが温かい目で読んで下さったら嬉しいです。

出会い

太陽も西の空に沈んだ21時40分頃、イルミネーションで煌びやかに彩られた町並みを九条槍介（くじょうそうすけ）は一人で歩いていた。携帯の履歴を見ると友人からの着信が一件かかってきていた。しかし、槍介はその着信に電話をかけ返すことなく歩を進めていた。理由は目的地がもうすぐ近くにあるということ、そして、電話代がもったいないという理由だった。

「あそこか、ずいぶんと盛り上がってるな」

槍介の視線の先にはファミリーレストラン。窓から見える店内は12月末にもなったのにまだクリスマスの余韻を感じるような装飾で店内はとても賑やかそうだった。しかし、その装飾品よりも槍介の目に止まったのはその店で男2人、女3人で騒いでいる客達だった。いわゆる合コンの最中なのだろう。

「憂鬱だな、あれに混じるのは。」

どこか冷めた態度で槍介は店の扉を開いた。扉のセンサーが槍介の存在を感知し、店内に機械音が鳴り響いた。

「いらっしゃいませ～、お客様お一人ですか？」

「あ、いや、えっと～」

「おお～、やっと来たか～、お前なぁ、俺電話しただろ～、でろよバ～カ」

そう言って近づいてきたのは槍介に電話をかけてきた友人、緒方（おがた）稜太（りょうた）。槍介の幼少時からの親友でこの合コンの幹事を務めている。仕事で槍介が遅れることを他のメンバーに伝えたものの、正確な時間を聞いていなかったため、電話をかけてきたようだ。話し方からして少し、酔っているようだ。

「悪い、電車の中だったし、もう近くまで来てたからさぁ」

稜太は眉間に皺を寄せ、「そうか」とだけ呟き、槍介の手を引き、合コンのメンバーに槍介を紹介した。

「皆、お待たせ、こいつが最後のメンバーの九条槍介だよ、ちょっと無愛想だけど俺の言ったとおりめちゃめちゃカッコいいだろ～」
「やめろよ」
　稜太の揶揄するような紹介にすかさず槍介がツッコんだ。しかし、槍介の反論とは裏腹に初対面の女子達は興奮気味に同感している。中でも一人そうとう酔っているのか槍介と目が合うなり店内に響き渡るような歓喜の大声を上げた。
「きゃあああああああ～、マジでカッコいい～、ホントにタイプ。マジ大好きかも～」
　その子の反応でも分かるとおり槍介はかなり整った顔立ちをしている。綺麗に通った鼻梁、大きく開いた瞳、それを引き立てる手入れの行き届いた柳眉、潤った唇、女性的な美しささえも感じる肌、全てにおいてほぼ完璧な男だった。唯一のコンプレックスは身長。男にしては背は低く、１６２ｃｍしかない。本人はそれを相当気にしていた。
「ねぇ～、ここ空いてるよ～、座りなよ～」
　正直槍介はあまりこうゆうタイプの子は好きではなかった。自分の見た目が女性にモテるのは２５年の人生で理解できている。しかし、見た目がカッコいいからという理由で付き合ってきた女は皆、面倒な奴ばかりだった。が、槍介はその子の隣に座った。その子の隣に座ることよりも、断って別の席に座ることの方が面倒だと感じたからだ。
「よろしく、待たせてごめんね、俺、九条槍介って言います」
「うん、よろしく～、私～真田翔子（さなだしょうこ）っていいまぁ～す。槍介君は今彼女とかいるの～」
　槍介は心の中で舌打ちをした。初対面でいきなり名前で呼ぶんじゃねえよ！何様のつもりなんだこいつ。と・・・・。
　そこから槍介はそのこの女の話を自然かつ適当に聞き流しながらその合コンの時間を乗り切った。

「やっと終わったな」と誰にも聞こえないように槍介は呟いた。・・・つもりだった。
「そういうなよな。こっちは結局お前にもっていかれてひきたて役だったんだぞ」
いつのまにか傍にいた稜太に独り言を聞かれていた。
「別に俺一人が独占してたわけじゃないだろ。宗彦もあの調子じゃあいつも通りお持ち帰りだろ」
「ああ、まぁな、目標の百人斬りにまた一歩近づいたってわけだ」
そういって二人が視線を送る先には合コンを共にした子の一人をタクシーに乗せ、意気揚々と自分もあとから乗り込もうとしている結城宗彦（ゆうきむねひこ）の姿があった。九条、緒方、結城、この三人は小学生からの幼馴染であり、高校までずっと一緒だった。槍介は宗彦が中学生の思春期真っ只中に言い出したある台詞を思い出していた。
朝槍介が登校し、自分の席に座ると突然自分の座る席の前に座り、「俺昨日ついにヤっちゃったんだよ」と言い出した。槍介はその当時まだあまり知識が無く、宗彦がなんの話を持ちかけてきたのか理解できなかった。そして、こう続けた。
「槍介、俺は百人斬りを目指そうと思う」
「百人斬り？」
槍介はその言葉の意味が分からなかった。舞台俳優を目指し、時代劇で殺陣のシーンでもやりたいのか？などと見当違いなことを考えていた。その槍介の怪訝そうな表情を見て察したのかすぐさま宗彦が言葉を付け足した。
「つまり、百人の女とセックスするってことだよ」
なるほど、宗彦の言うヤったというのは童貞を卒業した、ということなのだと槍介は理解した。そして、その初体験があまりにも感動的だったのでこれを百人の女性と交わすことを目指す、ということらしい。槍介は心の中で深いため息を吐いた。なぜ自分がこのダメ男誕生の瞬間に立ち会わなくてはならなかったのか・・・・、しかもそいつは曲がりなりにも幼少からの幼馴染なのだ。

「勝手にしろよ」
そのとき槍介は興味がないといわんばかりの態度で、無視したのを思い出していた。
「ちなみに今何人目なんだ？」
不意に稜太が聞いてきた。
「知るかよ」
と短く返し、槍介は自分の呼んだタクシーに乗り込もうとしていた。そのとき・・・・。
「槍介く～ん」
なんとも甘ったるい声を夜空に響かせ、全速力でこちらに向かって走ってきたのは先程から槍介にべったりだった真田翔子だった。
１２月の寒空の中、槍介は一刻も早くタクシーに乗り込み、暖をとりたいと考えており、その考えを一秒でも遅らされる原因にそれなりの憤りを感じながらも平静を装い、笑顔で対応した。
「どうしたの？真田さん、まだ帰らないの」
「翔子でいいよ～、あのね～、槍介君明日お仕事？私明日休みだから今日はまだ帰りたくないな～」
（うざい！）心の中でそう吐き捨てながら引き続き笑顔で返す。
「ごめんね、明日も早いんだ。また今度一緒に飲もうよ」
翔子は槍介の返答に悄然として俯き、小さく「そっか～」と呟いて女友達のもとに歩いていった。翔子の相手を終えると槍介はすかさずタクシーに乗り込んだ。
「可哀想に、俺の記憶が間違いでなければ君は明日は休みじゃなかったかな」
なにが可笑しいのかニヤニヤと口元を緩ませ、揶揄するように稜太が言った。その言葉に目一杯の皮肉を込め、槍介は答えた。
「可愛そう？お前ほどじゃないよ」
おそらく稜太が誰にも相手にされずに帰ることを余儀なくされたことを言っているのだろう。しかし、稜太はその言葉を気に留めることもなく槍介の乗り込んだタクシーに同乗した。夜の街灯がキラ

キラと輝いて、歩いていたときとはまた違った幻想的な美しさだった。この景色を恋人と眺めていたらロマンチックなのだろうか、と槍介は客観的に考えていた。そんなことを考えていたら不意に稜太が声を掛けてきた。

「なあ槍介、これから俺の用事に少し付き合ってくれないか？」

「なんだよ、改まった感じで」

時刻は既に夜中の０時を１５分程過ぎたところだった。こんな時間に用事、と槍介は頭をかしげた。が、不意に槍介は気がついた。タクシーのルートが明らかに自分の家に向かっていないことに。それが稜太の仕業であることも・・・。

「こんな時間にどこに連れて行こうとしてんだよ」

槍介を一瞥し、稜太は答えた。

「お前の恋のお勉強会さ」

稜太のセンスの欠片も感じないジョークを完全に無視し、槍介は見覚えのない景色をひたすら眺めていた。稜太とのくだらない問答が面倒になったからだった。そして稜太のその言葉に槍介の頭にはトラウマに近い過去の苦い思い出が甦った。車の窓ガラス越しに槍介の表情を確認し、その心情を察したのか稜太が続けて口を開いた。

「お前、まだ美香ちゃんのこと忘れられないでいるのか？」

「な、なんだよそれ、いつの話ほじくり返してんだよ」

槍介は突然稜太に振られた話題に明らかに狼狽していた。

「俺の目はごまかせないぜ、お前今でもたまにあの子のこと思い出して・・・」

「稜太！」

槍介の反応に一言、悪い、とだけ返し、稜太も黙ってしまった。森閑とした車内に車のエンジン音だけが鳴り響いている。ふと槍介は思った。この話を確実に聞いていたであろう運転手の男はこの話を聞いてどう思っているのだろう。こういう乗客のプライベートな会話を聞くことには慣れているのだろうが、やはり槍介は少し恥ずかしくなってきた。そんなことを考えているとタクシーも目的地に

到着した。
「着きましたよ。４２５０円になります」
タクシーの運転手が初めて喋った言葉だった。当然のことなのだがあれほど大人しかった運転手も仕事と金の話をするときは口を開くのだ、と槍介は少しだけ切ない気持ちになった。料金は稜太が誘い主だということで３千円出してくれたので、槍介は１２５０円だけ出してタクシーを降りた。
「なんだよ、ここ」
見慣れない、でもテレビなどではたまに見かけるか、最近ではドラマなどの舞台になることもしばしばあったかもしれない。そんなことを考える槍介の視線の先には煌びやかに蛍光ライトを装飾し、街のイルミネーションをはるかに超える、実際に始めてみる槍介にとっては幻想的ともとれる店だった。
「どんな女でも簡単に落とすお前だからこそこういう所に来ることは絶対にないだろうからな。俺の言葉の意味が分かったか」
どうやらタクシーで完全に滑ったジョークは稜太にとっては本気だったらしい。気にしていたのか槍介に思い出させるように言った。
「いわゆるキャバクラってやつだろ、金がかかりそうだから人生で来ることは絶対にないと思ってたよ」
槍介の反応になにやら物申したそうな稜太だったが、言葉で説明するより実際に入ったほうが分かりやすいと思ったのか、無視して店に向かって歩を進めた。
「いらっしゃいませ。二名様でよろしかったでしょうか？」
スーツ姿の男が稜太を客と認識すると早速営業的な口調で喋り始めた。やはり仕事となると誰でもこうなるのかと槍介は改めて感じた。
「はい」
「ありがとうございます。お客様ご指名はありますか？」
「俺は華恋（れんか）ちゃんで、こいつは初めてなんで誰でもいいです」
「ありがとうございます。ではご案内いたします」

稜太は慣れた会話でこの店の常連客である事を示唆していた。しかも指名のお気に入りのキャバ嬢までいるようだ。槍介は店内に案内されながら必然的に浮かび上がった疑問を稜太に問いかけてみた。
「お前この店にどのくらい通ってんだよ？」
「んっ？４ヶ月くらいだよ」
結構来てるじゃねえか！槍介は心の中でツッコんだ。薄暗い廊下を進んでいくと一筋の光が目に付いた。その先の光景はまさに槍介の予想外。店内よりもさらに輝きを増した光の正体は豪華そうなシャンデリア、木製の棚の上には見たことも、勿論飲んだこともないようなおしゃれなシャンパン、あれがいわゆるドン・ペリニョンというやつだろうか。槍介は申し訳ないがこのあと出て来るであろうキャバ嬢よりもそちらの方に興味をそそられた。
「こちらで少々お待ちください」
案内をしてくれたボーイは一言そう告げて店の奥に消えていった。
「槍介、座れよ」
ドン・ペリニョンに心を奪われていた槍介は稜太に声を掛けられてから気がついたように案内された席に座った。
「稜太、あれいくら位するんだろうな」
「ドンペリか？物によるだろ」
「物？」
「ドンペリにも種類がある。この店で一番安いやつなら二万くらいのもんだろ。高いやつならドンペリゴールドってのが十万くらいするんじゃねえか。俺もさすがにそいつを注文するほどの勇気はねえから詳しくは知らねえけどな」
槍介はホストになって客からそのドンペリゴールドを注文させてやろうかという野望が一瞬頭によぎった。が、接客は苦手だし好きでもない女の相手をして金を稼ぐのは億劫だと一瞬の野望をかき消した。槍介はしばらくどうにかしてあれを口にできないかと思考を巡らせていたら隣で稜太が口を開いた。しかし、それは槍介に対するものではなかった。

「おお～、華恋ちゃん、久しぶり～」
「久しぶり、稜太君、今日はお友達を連れてきてくれたの？」
「まぁね、こいつに新しい世界を見せてやろうと思ってね」
そういって出てきたのは青いドレスを身に纏い、腰くらいまであるであろう長髪を綺麗に束ね、右目の下にある泣き黒子が妙に妖艶な雰囲気を漂わせている、綺麗な女性だった。名前からして稜太が先程指名した子だろう。槍介は普通の女性にはないオーラを感じた。
「よろしくお願いします」
そんな槍介に後方から話しかけてきたのはどうやら華恋という子と一緒に出てきたキャバ嬢でこれから槍介の話相手をしてくれることになる女性だった。こちらも容姿はとても美しく、華やかなピンクのドレスを見事に着こなし、華恋に負けないほどの美女だった。
「あっ、どうも、九条槍介です」
槍介は女性と会話をすることは慣れていたはずだったが、そのオーラに負けてかしこまってしまった。
「桃華（ももか）です。もしかして、緊張してる？」
やはり色んな人と話をする仕事をしているせいか一発で槍介の警戒がばれてしまった。槍介は心の奥まで見透かされているのではないかと少し不安になった。
「ちょっと緊張してるかも。桃華ちゃんって可愛い名前だね」
槍介は心を見透かされた照れを隠すように話題を切り出した。
「ありがとう。でもこれ源氏名だから、本名じゃないのよ」
本当に何も知らない槍介に対して子供に躾を教えるような優しい話し方で桃華は答えた。そして、槍介はその返事に対して必然的に浮かび上がった質問を続けた。
「へぇ～、じゃあ本名はなんていうの」
「ヒ・ミ・ツ、次来た時に指名してくれたら教えてあげてもいいけど」
桃華は人差し指を口元で一本立てて莞爾として微笑み返してきた。槍介はまたお金の為に働く大人の顔を見てしまったと妙な既視感に

捕らわれた。しかし、その反面どこか今までの女達とは違う何かが槍介の興味を惹いていた。
「稜太く～ん、またきてね～」
「もちろん！なんだったらまた明日来るよ～」
ここにも働く大人が一人・・・、稜太は完全に酔っ払っている勢いだけで勝手なことを言っているが、槍介はもし本当に稜太が明日も来るつもりなら着いて行ってもいいと少しだけ思っていた。
・・・、あの子の本名が気になる。今はただそんなことしか考えていなかった・・・・。

三角関係

今日は日曜日、槍介はあまり目覚めはよくないが休みの日になるとなぜか朝早く目か覚めてしまう。二度寝の楽しみ方を一切知らない不幸な男だった。

「こんなことなら昨日の誘い、受けとけばよかったかな。」

槍介は既に名前すらも覚えていない、昨日の合コンで知り合った子の誘いを一時の鬱陶しさで断ってしまったことを軽く後悔した。不意に枕元に置いて充電している携帯を手に取り、着信やメールが来ていないか確認してみたが、こんな時に限って0件、というか朝の7時から連絡が来ていたらそれはそれで鬱陶しいかもしれない。

宗彦は昨日はどうなっただろうか・・・。そんなことを考えながら肌寒さを感じた槍介は何気なしにズボンのポケットに手を忍ばせた。どうやら昨日は酔っていたため私服のままベッドに飛び込んでしまったらしい、記憶が少し曖昧だった。

「んっ、なんだこれ。」

右ポケットに入れた手が何かに触れたのを感じた。まさぐってポケットから取り出し、確認すると昨日のキャバクラで貰った名刺のようだ。名刺の名前には恋華と刻まれている。

「この子、俺が昨日話してた子じゃないよな・・・・」

槍介は曖昧になってしまった昨日の記憶を掘り返してみた・・・・。

「確か店に着いて、稜太がこの子を指名して、俺についたのは桃華って子で、一時間だったかな、話をして、帰ることになって、・・・・・・・・!!!」

槍介の脳に一瞬稲妻が走った。

「そうだ、帰り際に恋華って子がこっそり俺に名刺渡してきたんだ。

」
（連絡待ってるね。）すれ違い様に耳元で囁いて不敵な笑みをこちらに浮かべていたような気がする。名刺を裏返してみるとそこに恋華のものと思われる携帯番号とメールアドレス、槍介は少し背徳を感じた。
「どういうつもりなんだ。あいつは稜太が指名したはずなのに・・・」
槍介は恋華の思惑を確かめるために携帯のメール画面を開き、新規作成のアドレスを打ち込む欄に名刺に書かれたアドレスを記入し、本文にこう綴った。
『昨日はどうも、それと、朝早くからメールしちゃってごめんなさい。今更こんなこと聞くのは変かもしれないけど、なんで俺に名刺渡してくれたの？嬉しいんだけど稜太に悪いからあんまりこういうことしてほしくないな～』
槍介は語尾をのばしてなるべく機嫌を損なわないように打った。そして、送信ボタンを押してメールを恋華に送った。しかし、夜の仕事をしているので当然朝と夜は逆転しているだろうし、メールが返ってくるのは夕方くらいだろうと考え、あまり期待はしていなかった。
今度はアドレス帳を開き、宗彦のアドレスを開き、メールを作成した。
『お前、昨日どうだったの？』とだけ打ち込んで送信した。性交に成功しているなら宗彦もまだ寝ているだろうと思ったが槍介には他にやることがなかった。すると以外にも早くメールが返って来た。送信者は・・・・、宗彦だ。
『大成功だよ。お前なんで昨日帰っちゃたの？一人言い寄ってきてた子がいたじゃん』当然の疑問だろう。槍介はその疑問に答えると共に自分も気になっていることを聞いてみた。
『なんとなくそんな気分じゃなかっただけだよ。てかお前百人斬り

するとかいってたじゃん？今何人目なの？』と打って送信する。すぐに宗彦からの返信。
『ふ～ん、勿体ねぇじゃん。こっちは順調に進んでるよ。今５８人目、先は長いぞ～』
残り４２人、確かに先は長いが槍介には宗彦がその先の長さを楽しんでいるように思えた。というか１６歳で童貞を卒業し、今２３歳、このペースは速いのか遅いのか、槍介にはわからなかった。そんなことを考えていると久しぶりに夢の世界が槍介を歓迎してくれた。そして、そのまま重い瞼をゆっくり閉じた。
単調なリズムが活動を停止していた槍介の脳に呼びかける。しばらくしてそれが携帯の着信音だということに気付いた槍介が昼寝独特の睡魔の無限ループからなんとか起きあがろうとした時、着信音が停止してしまった。しかたなく眠気眼を擦りながら履歴を見て電話を掛けてきた人物を確認する。
着信１件　稜太
メール受信１件　恋華
「稜太か、てか今何時だ」
槍介が携帯の時間を確認すると夕方の１７時だった。かなり長い時間眠っていたようだ。稜太の着信は先程として、恋華のメールが返ってきたのは何時なのか、槍介はメールボックスを開き、恋華からのメールの返信時間を確認すると昼の１４時だった。以外にも早く返ってきたことに槍介は少し驚いた。それと同時に仕事で疲れて眠っていたのに自分からのメールで起こしてしまったのではないかと罪悪感にも苛まれた。ついでにメールの内容も確認した。
『いきなりあんなことしてごめんね。でも槍介君のこと一目見たときに気に入っちゃんたんだもん！迷惑だったかな？稜太君とはお店でしか会わないよ。でも槍介君とならお店の外でも会ってもいいかなって思っちゃった。今度はいつ会える

かな？すごく楽しみにしてるよ』
槍介は困惑していた。稜太のお気に入りに気に入られてしまったということに。とりあえず恋華にメールを返信するより先に稜太の着信に掛け返してみることにした。単調な着信音が三回ほど鳴り、稜太と電話がつながった。
「もしもし、槍介？」
「ああ、どうした？お前から着信あったんだけど」
「別に特に用事も無かったんだけどな、もし暇だったら飯でも食いに行かねえか？」
なるほど、暇潰しに掛けてきただけのようだ。槍介は恋華との件があるため、稜太の着信に対して少し不安がよぎっていた。もしかしたら恋華に名刺を渡されたことを知っていて問い詰められるのではないかと・・・・・。
「行くよ、さっきまで寝てたから腹減った」
「じゃあいつもの場所でいいか？」
「ああ、すぐ行くよ」
稜太と槍介のいつもの場所といえば決まってよく行くレストランのことだった。二人はかなり前から通っている店の常連だ。槍介は枕元に落ちている恋華の名刺を一瞥し、着替え始めた。槍介の答えは決まっていた。稜太という親友との関係に軋轢が生まれるくらいなら恋華などどうでもいいと・・・、困っているときに相談に乗ってくれたり少し無愛想な槍介が心を開いて会話ができる数少ない人物だ。槍介は恋華からのメールに返信しなかった。そして、一度は登録した恋華のアドレスも消した。
人気の無い森閑とした路地裏にひっそりと立つ、レストランというよりカフェに近い店の窓際の席に座り、稜太は槍介を待っていた。実は稜太は何気なしに槍介を誘ったわけではなかった。見てしまったのだ。恋華が槍介にこっそりと自分の名刺を渡しているところを・・・。耳元で何か囁いていたことも。

「はぁ」と短いため息を吐き、稜太はひたすら槍介が来るのを待つ。それが稜太にとってとても永い時間に感じられた。不意に店の扉が開き、店員に来客を知らせるベルが店内に響き渡った。
「待たせたな」
「いや、俺も今来たところだよ」
「・・・・、何か頼んだのか」
「いや、まだだ」
槍介は既に何かを感じていた。稜太が自分を呼び出したのは何か話があってのことなのかもしれないと・・・。とはいえ空腹では頭が回らないということでとりあえず注文をすることにした。
「すいませ～ん」
「は～い、ただいま参ります～」
店はいまどき珍しく、呼び出しのボタンが無い為、直接店員を呼ばないといけない。あまり広い店ではないので、そんなに声を張らなくても厨房にいる店員の耳には声が届く、槍介はこの店のお気に入りのメニューを注文する。
「茸クリームパスタとレモンティー」店員が注文を繰り返す。
「お前は？」槍介が稜太に注文を促した。
「ミルクココア」再び店員が注文を繰り返す。
「以上でよろしかったでしょうか？」槍介が小さく「はい。」と答えると店員は厨房に戻っていった。
「なんかあったのか？お前らしくないじゃんか。元気無いし・・・・」
「たまには俺もこんなときがあるんだよ」
極めて珍しいケースだがそんなときが稜太にもあったのか。槍介はおそらく初めて見たような気がする。
「話せよ」
槍介は稜太の相談を聞く姿勢を見せた。一呼吸置いて稜太が重い

口を開く。
「お前、昨日恋華ちゃんと別れ際に何か話してなかったか？」
槍介は背筋に電撃が走った。見られていたのか・・・。
「いや、その～、また遊びにおいで、みたいなこと言われただけだよ」稜太は槍介を睥睨しながら言葉を返してきた。
「本当にそれだけか？何か渡されてなかったか？」槍介の動揺を感じて不安が確信に変わったように稜太は語気を強めた。
「信用できないのか？確かに綺麗な人だなって最初は思ったけど、俺は正直綺麗な人は見慣れてんだよ。恋華さんだけ特別視したりしねえよ」
槍介は自分の恋愛遍歴を改めて稜太にはっきり告げることで信憑性を高めようとした。暫く俯いた後、稜太が重い口を開く。
「わかった。疑って悪かったな。俺達親友だもんな」
このとき稜太が本当に信用してくれているのか、感情を抑えて納得したふりをしたのか槍介には分からなかった。ただ悪気は無かったとはいえ真実を偽ってしまったことに対して少し罪悪感に苛まれた。
「勿論だよ」
と、怪しまれないようにとりあえず槍介は言葉を返した。
「お前結局ココアしか飲んでねえじゃねえか」
「ああ、別に腹減ってたわけじゃねえもん。言っただろ別に用事は無かったって。暇だったんだよ」
その日槍介には親友であるはずの稜太の事が分からなくなっていた。別れ際の稜太の表情が心なしか曇っているように思えて仕方がなかった。そして、槍介は稜太と話をしているときにあることをどうしても確かめたくなった。タクシーを拾い、昨日稜太が運転手に伝えた場所を思い出し、乗り込んだタクシーの運転手に告げた。
「いらっしゃいませ。お客様ご指名は？」
槍介は昨日と同じ席に案内され、昨日と変わらない光景をただ無

心で眺めていた。暫くして指名した子が席に近づいてきた。
「嬉しいな、今度は私を指名してくれるなんて、来る前に連絡してくれればよかったのに、びっくりしちゃった」
そういって嬉しそうに恋華は微笑んだ。
「ごめんなさい。急に指名しちゃって、でもどうしても恋華さんに聞きたいことがあって」
恋華は大きな瞳をさらに少し広げ、首を傾げた。
「聞きたいこと？なぁに」
「恋華さんにとって」
そこまで喋ったとき、突然恋華が槍介の言葉を制止した。
「恋華さんなんて畏(かしこ)まった呼び方しないで。恋華でいいわ」
「わかりました。・・・恋華にとって、稜太って何なんですか？」
唐突な質問に恋華は一瞬戸惑いを見せたが、すぐにフッと微笑し、答えた。
「お客さんよ。彼は、私にも生活があるもの。彼にはお金を払ってもらう代わりに一時の幸せを売っているのよ」
その答えに槍介は語気を強めて反論する。
「でも、あいつは本気で恋華のことを好きになってるみたいなんだよ。確かに仕事って気持ちもわかる。でも、もう少しだけあいつの気持ち考えてやってくれないかな」
興奮気味の槍介を宥(なだ)める様に恋華は冷静に返す。
「稜太君はこういうお店は向かないと思うわ。これは私の持論なんだけど、お客さんとキャバ嬢、この二人がどんなに好意的な雰囲気になってもその二人の間にはお金が発生
しているの。だからここは本当の恋愛をしに来る場所じゃないのよ。槍介君はこういう経験したこと無い？こっちが別れたいのに未練がましく付きまとわれる鬱陶しさ。どう
してそんなことになるかっていうとそこに愛があるからなのよ。お金で買える愛ならそんなことにはならないわ」
槍介は反論することができなかった。そんなに年齢に差があるわ

けじゃないのに恋華の言葉には重みがあった。大人の世界で働く人の正当な意見。事実槍介は異性に鬱陶しいと思うことは何度もあった。桃華の時と同様、またしても自分の心を見透かされてしまったような気持ちになった。何も言い返せない槍介に誘惑的な眼差しで恋華が声を掛けた。

「ごめんね、ちょっと言い過ぎちゃったかな。私槍介君とこんな言い争いがしたくて連絡先を教えたんじゃないわ。ねぇ、私がメールで言ったこと覚えてる？」

槍介は戸惑いながらも記憶を振り返る。

「槍介君とならお店の外で会ってもいいかな」

槍介が思い出すのとほぼ同時に恋華が言った。しかし、キャバクラ初心者の槍介にはその言葉の意味が分からなかった。

「それってどういう意味？」

槍介が怪訝な表情を浮かべ、恋華に探るように聞いた。

「だから、これから二人でお店を抜けてどこか行こうよ、ってこと」

その言葉を聞いて槍介は唖然としてしまった。それは槍介にとって親友を裏切るということになる。しかし、槍介はここである事を思いついた。そして・・・。

「わかった。楽しい夜にしようよ」

自分の自信に満ち溢れた笑顔で微笑み返した。二人はそのまま店を出て、しばらく近くのバーで酒を飲み、夜景の綺麗な・・・、ホテルに入っていった。

軋轢

槍介は携帯のメール受信履歴を確認した。ここ一週間毎日同じ人からメールが来る。しかし、槍介はその人物からのメールに返信せず、一応内容だけ確認していた。先程も一件のメールを受信した。受信ボックスを確認するとそこには恋華という名前が連なっていた。あの日の夜から一夜明け、毎日槍介にメールを送ってくるところをみるとどうやら恋華は本気で自分に気があるらしい。しかし、槍介があの夜恋華の誘いを受けたのは槍介が恋華に惚れたのではなく、ある考えがあったからだった。槍介は受信メールを確認し終えると携帯を閉じた。そして、小さく溜息を吐いた。

あの夜、恋華はあっさりと自分を誘い、体を委(ゆだ)ねてきた。そんな軽い女に親友の稜太は金を貢いでいたのだと怒りすら覚えるほどに。しかし、その日のことを稜太に言うわけにもいかず、どうにか解決する方法を考えていたのだった。勿論あれから槍介は恋華には一度も会ってはいない。

ベッドの横の本棚に置いたアナログの時計に目をやると時刻は17時50分を3分程過ぎていた。今日は夜勤なのでそろそろ家を出ないとと欠伸をしながら腰を上げた。

「行くか」

槍介が今の会社に勤めてもう5年程になるが、未だに夜勤の眠気がなれない。工場勤務という仕事を選んだのは高校卒業後、特にやりたいこともなく、卒業までになんとか就職先だけでも決めておきたいという焦りから適当に選んだだけだった。そのためあまり思い入れも無く、辞めて別の仕事を探そうと考えたことも幾度と無くあった。というより、今でも時折そう考えてしまう。部屋の鍵を閉め、自分の住むアパートから車で10分程の道のりを運転して行く。眠たいせいか流れる音楽も耳に入らない。景色も5年も変わらぬ道を通うと新鮮味が全く無いので槍介はほぼ無心で車を運転していた。

飽きっぽく冷めやすい槍介の悪い癖だった。そんな槍介の冷めた心の扉が不意にノックされる。稜太からの着信だった。車内に流れる音楽のボリュームを下げ、運転中に通話のできるスピーカーを耳に着け、電話に出た。
「もしもし、稜太？」
「槍介か、今なにしてる？」
声が聞き取り辛かったので音楽のボリュームを更に下げる。
「今？仕事に向かうところだけど」
「そっか、終わって時間あったら連絡もらってもいいか？話したいことがあるんだ」
それがなんなのか分からず、槍介は特に気に掛けることなく答えた。
「わかった。今日の仕事終わったら明日休みだから終わったら連絡するよ」
「眠かったら起きてからでもいいぜ、じゃあ仕事頑張れよ」
電話を切った先で稜太は怒りを抑え、歯を食い縛っていることを槍介は知らない・・・。

単調な代わり映えのない仕事を終え、槍介は眠い目を擦りながらポケットから携帯を取り出した。仕事場の休憩所に一人座り、稜太に電話を掛けようとしていた。仕事前に電話が掛かってきていたので履歴から稜太の番号を表示し、発信した。しばらくして稜太が電話に出た。
「もしもし、槍介？」
夜勤明けに電話を掛けたため、稜太は寝ていたようだ。電話の先の声は元気が無い。
「悪い、寝てたか？」
「いや、いいよ、俺の方から用があったんだから。」
稜太は寝起きで元気がないのだろうか？槍介はこの疑問に既視感を覚えた。

「その用事ってなんだよ？」
「・・・お前、恋華ちゃんと会っただろ？」
その言葉で夜勤明けの槍介の眠気が一気に覚めた。
「なんだよ、いきなり」
「嘘なら吐かなくていい。俺は全部知ってるんだ」
稜太の本気の声に槍介は観念した。いつか話さなければと槍介自信考えていたことだ。もちろん、全て稜太の為に・・・。
「稜太、あの子は止めとけ、遊びならともかく本気になっちゃダメなんだよ。俺はあの子に稜太の事をどう思ってるか聞いたんだ。稜太は恋華にとって仕事の付き合いでしかないんだよ。直接恋華に聞いたんだ。間違いない、お前のことを利用してるんだ」
「黙れ、お前は恋華ちゃんとヤっといて・・・、自分のこと棚に上げてよくそんなことといえるな」
槍介は困惑した。なぜ稜太はそんなことまで知っているのかと。
「お前なんでそんなことまで」
「直接恋華ちゃんに聞いたからだよ。お前に会いたいからお前を連れてきてほしいって頼まれたんだ。腹立ったからなんで槍介に会いたいのか聞いたら全部話してくれたぞ、一人で恋華ちゃんに会いに行って口説いてたんだろ？」
稜太は恋華にどういう説明を受けたのか。槍介はどうしていいか分からなかった。どうすればこの誤解を解けるだろう。心の中でなんども叫び続けた。稜太、お前の為にやったことなんだ、お前のことが心配だったからなんだと。
「お前が俺よりもてる事に関して俺はなにも気にしてなかった。でも俺の好きになった子を奪うのは裏切りだ、俺はもう・・・お前とは付き合いをもてない。もう連絡もしないから」
「まてよ、稜太、俺の話も聞いてくれよ」
「じゃあな」
そう言って稜太は一方的に電話を切ってしまった。こんなことに

なるなんて思ってなかった。稜太はよく合コンを開き、自分を誘ってくれるが稜太自信はあまり恋愛に興味がないらしく、槍介や宗彦に出会いのチャンスをくれていた。そんな稜太が本気で好きになった相手が恋華のような金目的で尻軽女だったことが槍介はどうしても許せなかった。今度は自分の番だと稜太の為に恋華に会いにいったのに・・・。槍介は力なく立ち上がり、休憩所から出ていった・・・。

心の拠りどころ

稜太に絶縁されてから、槍介は全く仕事が手につかず、無聊な日々を送っていた。あれから一週間が経ち、その間に何度か槍介は稜太に連絡を取ろうと試みていた。電話を掛けてみたり、メールを送ってみたりしたが、稜太は電話に出ることは一度もなく、メールも返ってこなかった。しかし、槍介はまだ希望は捨てていなかった。

電話番号はともかく、メールアドレスは簡単に変更できる。槍介のメールは稜太に間違いなく届いている。もし、槍介からのメールを拒否しようと思っているのなら、アドレスを変更し、自分に教えなければいいだけのことだ。それをしないということはまだ稜太と仲直りできる可能性があると槍介は信じていた。

今度こそメールが返ってくる、そう信じて槍介は再び稜太にメールを送信する。

「そろそろいくか」

槍介が時計に目を向けると、時刻は十二時半、槍介は立ち上がり休憩所から出ていった。

全ての業務を終え、タイムカードを押し、槍介は帰宅しようと自分の車に向かっていた。車に乗り込み、車のエンジンを掛けようとキーを差し込んだ時、ふと稜太に送信したメールの返信がないか気になり、ズボンのポケットから携帯を取り出し、液晶画面を見て、槍介は怪訝な表情を浮かべた。

「ポストマスター？」

嫌な予感が槍介の頭に過ぎる。そしてそれが何なのか、何を意味しているのか理解した。稜太の携帯に送ったはずのメールは届いておらず、槍介の携帯に返ってきていた。

「そんな・・・、稜太」

思わずポツリと独り言を呟いた。稜太は携帯のアドレスを変更し、変更したアドレスを槍介に教えてくれなかった。今までの努力も希

望も、全て水泡に帰した時、槍介の瞳に一筋の涙が浮かんだ。親友は本当に自分のことを拒絶しているのだと知り、槍介は今までに感じたことのない感情に心を支配された。
しばらく俯き、何も考えずに車のエンジンを掛けた。虚ろな目で車を運転し、自宅に着く。作業着を脱ぎ、シャワーを浴び、その日は何かにとり憑かれたように酒を飲み続けた。その日の出来事を忘れられるまで・・・。

携帯のアラーム音に起こされ、槍介は不快そうに目を覚ました。昨日の飲み過ぎは完全に胃の機嫌を損ない、槍介は朝から頭痛と胃もたれに襲われた。おもむろに携帯を開き、カレンダーを確認すると今日が日曜日だったことに気付いた。
「そういや今日は仕事休みだった」
脱力して布団に倒れこみ、目を瞑ってみる。しかし、自分が二度寝を楽しめない体質であることを思い出し、薄く目を開いた。昨日は酒を飲んでいる時は忘れていたが、酒が抜けてしまい、稜太の事が頭をよぎった。
「せめて・・・、恋華とうまくいってくれればいいんだけどな」
そうすれば自分の今の気持ちも救われる。それと時間以外今の自分を癒してくれるものなどないと思った。今日は何をしよう、暇があれば連絡をしていた稜太に縁を切られてしまい、槍介はほぼ初めて一人で退屈な時間を過ごすことを余儀なくされた。
目を閉じてみるが眠れるわけもなく携帯のメモリーを開いてみた。宗彦はああ見えて普段は仕事で忙しく、合コンを開いた時以外はあまり遊ぶことはなかった。
「さて、どうしたもんか・・・」
連絡できる女ならいくらでもいるのだが、槍介はあまり自分から女の子をデートに誘うことはしなかった。誘われることはあってもその逆はあまりないため、慣れていなかった。考えてみれば彼女もここ数年いない、槍介はこの機会に一人の女の子と付き合うことも

考えてみた。しかしそれもすぐに自ら頭からかき消した。
「恋愛なんてクソ食らえだ」
槍介がそんな考え方をしてしまうのは高校生の時に付き合っていた彼女に言われた一言に槍介が激怒してしまったからだった。気にしていることだったので稜太ですらそこに触れることはしなかった。
槍介がメモリーを一つひとつ下にスクロールしているとひとつの名前が目に付き、スクロールする指を止めた。
「桃華、そんな子知り合いにいたかな」
実際槍介はしばらく連絡していない女の子がたくさんいるため、顔を思い出せない子はこの桃華だけではないのだが、槍介は妙にこの名前が気になった。名前をクリックするとアドレスは表示されたが、携帯の番号は交換しておらず、全く思い出せなかった。今度はアドレスをクリックし、メール作成画面を開いた。
そして試しに『俺のこと覚えてるかな？もし覚えてたら連絡もらえたら嬉しいな～』とだけ打ち込み、メールを送信した。特に返信を期待していたわけではなかったので槍介はそのまま携帯を放り出し、ベッド近くの本棚から一冊漫画を取り出して読み始めた。何度も読んだ内容が頭に入ってくるわけもなく、槍介の暇つぶしは悲しく続いた。

あまりの退屈に堪えかねた槍介は部屋を飛び出し、街に繰り出すことにした。今までそれをやらなかったのは一人で行動することにあまり慣れていないからだった。
読み飽きた漫画を読み続けるよりは何か変化があるだろうと重い腰を上げることにした。電車は窮屈だし、人が多いところはあまり好きではないので槍介は自分の車で出かけることにした。渋谷の街に着き、コインパーキングに車を止め、どこを目指すわけでもなく歩き出した。行きかう人は皆恋人や友人と楽しそうに話しながら歩いている。
槍介が自分だけ浮いていることを気にしながら歩いていると横か

ら見覚えのない女性に声を掛けられた。
「あの～、今ってお買い物か何かしてるんですか。もしかして一人だったりしますか」槍介が声を掛けてきた女性を見ると全く見覚えがなかった。いわゆる逆ナンというやつだった。声を掛けてきた女性は十代の女性向け雑誌などに載っているような派手な格好をしている。しかし、ここが渋谷なので全く違和感はない。ただ槍介は一人寂しく歩いていることを気にしていたのでそのことを尋ねられ、少し挙動不審になってしまった。
「あ、あの・・・一人ですけど」そういうと女性は嬉しそうに笑顔をつくり、聞いてきた。
「もしよかったらどこかでお茶でもしませんか～。私も今一人なんですよ～」その子の見た目は身長は低いが目は大きくスタイルも悪くない。彼氏がいないのが不思議なくらいだ。槍介はあらためて自分が女性受けする存在であることを自覚したのだが、その反面、男の親友一人振り向かせることの出来ない自分に空しくなった。
「ごめんなさい。今日はちょっと急いでいるんで、また今度」そういって足早にその場を立ち去っていった。
街に出ても自分は一人では退屈しのぎは出来ないことに気付き、喫茶店に入り、席の片隅で一人コーヒーを啜っていた。このあとどうするか全く思いつかないまま時間だけが過ぎていく。
なにも考えずボーっとしていると不意にズボンのポケットに入れた携帯が鳴り、開いてみると画面には桃華と表示されていた。その時槍介は自分が桃華という人物に朝メールを送っていたことを思い出した。受信ボックスを開き、内容を確認した。
『返事遅くなってごめんね。でもアドレス交換してからしばらくメール来ないからもう忘れられてるのかと思っちゃた～。だからメールもらえて嬉しいよ。また今度暇な時にでも遊びにきてね～』
その内容を見て槍介は頭を抱えた。また今度遊びに来て、ということは自分は一度その子の家に行ったことがあるのだろうか。槍介は忘れていることをなるべく悟られないように返信メールを作成し

た。
『あの日はすごく楽しかったから忘れるわけないよ～、でもそんなに久しぶりでもないよね。最後に会ったのいつ頃だっけ～』
落ち着いて考えてみると槍介は自分の性格とメールのやりとり時の性格は全く別人である事に気付いた。自分は人と話をする時語尾を伸ばしたりはしない。そう考えると少し恥ずかしくなってきた。しばらくすると桃華からの返信がきた。
『ひど～い、やっぱり忘れてるじゃ～ん。正直に言えば許してあげるよ～』
読み終えて槍介は既視感を覚えた。自分の心が簡単に見抜かれたのはこれが初めてではなかったような気がする。「あっ」つい大きめの声で呟き、この人物が誰なのか思い出した。
『ほんとごめん。実は忘れてたんだ。でも今思い出したよ。キャバクラで会った子でしょ。』と打ち込んだ。すぐに返事がくる。
『せいか～い。あれから全然遊びに来てくれないから私も君のこと少し忘れてたも～ん』
忘れられていたことに対する抵抗のようなメールが返ってきた。あまり接したことのないタイプだと感じ、槍介は久しぶりに異性とのメールのやりとりが楽しくなってきた。
『ごめんごめん、近いうちに遊びに行くよ。桃華ちゃん、何曜日ならいるの』
返事には『う～ん・・・、今日！』とだけ打ち込まれていた。そのメールはすぐにでも会いに来いと言っているように槍介には聞こえた。しかし悪い気はしなかった。メールのやりとりをしているうちに桃華に会いたい、話がしたいという気持ちが槍介の中に徐々に芽生えてきた。そして、会う約束のメールを作成した。
『わかった。お店って何時から会いてんの』稜太に強制連行されたため、槍介は店の開店時間を知らなかった。一口コーヒーを口に含んで飲み込むくらいのタイミングで返事がきた。その返事の早さに驚き、むせてしまった。

『今は昼キャバとかもあるから来たいなら今すぐでも開いてるよ』
なるほどと思い時間を確認すると十五時を十分ほど過ぎたくらいの時間。さすがにこんな時間から酒を飲む気にはなれず、陽が落ちてから行くことにした。
『わかった、十九時くらいに行くよ』と打ち込み、残ったコーヒーを全部飲み干し、店を出た。
適当に時間を潰すため初めて一人でゲームセンターに入った。中学生くらいの男の子が二人でシューティングゲームをしていたり、女子高生が四人でプリクラを撮っていたりとても賑やかだった。室内の隅には不良高校生がたむろしており、その一角だけ妙にスペースが空いていた。必然的に槍介もその一角を避けながら千円札を両替機に入れた。
百円玉が十枚になって出てきたのを掴んで財布に入れ、向かったのはバスケットゴールに制限時間内に何回シュートできるかというゲーム。槍介は高校時代バスケ部で活躍しており、自信があった。最高点数は一分間に三十八回、なかなかの記録に意気込みながらボールを持つと久しぶりの感触を覚えた。
・・・結果は二十四回、特に悔しさがあるわけでもなくこんなものかとその場を後にしようとした時。
「きゃ、やめてください」
「いいじゃん、姉ちゃん一人なんだろ～、俺達と遊ぼうよ」
誰もが避けていた一角に目をやると先程から室内の角を占領していた不良グループが一人の女性をナンパしていた。その様は傍から見るとナンパとは名ばかりの悪質な絡みにしか見えないが。女性は半泣きになりながら掴まれた右腕を必死に振りほどこうとしている。無論助けようとする人など一人もいなかった。あんなに嫌がられているのにその女性が観念してついてきたとして楽しいはずないだろう、そんなことを考えながら槍介はおもむろにその不良グループに近づいていく。
「おい、嫌がってるだろ、離してやれよ」

「あん、なんだてめえ」不良は三人、そのうちの一人が槍介に近づいてきた。そして、槍介の胸倉を掴もうとしてきたとき、素早く手首を握り、思いっきり捻った。そして横腹に一発アッパーを打ち込み、一瞬で一人をやっつけた。

槍介の態度に頭にきたのか残りの二人も近づいてきた。同じく槍介の服を掴もうと手を伸ばしてきたのを体を反らせてかわし、一本背負いで投げ飛ばした。無防備になった腹を右足で思い切り踏みつけると小さく「ぎゃっ」と呻き、苦しんでいる。そして最後の一人を睨む。大抵こういうとき最後の一人は手を出さなくても恐れてかかって来ない。その予想が的中し、明らかに狼狽する不良に二人を連れて帰れと示唆するように倒れた二人を指差すと腹を踏まれた男を抱えてゲームセンターから出て行った。もう一人はかろうじて歩くことができたようで殴られた腹を押さえながらそれについて行った。

「あの、ありがとうございます」先程絡まれていた女性が助けてくれた槍介に礼を言った。

その女性を見たとき、槍介はなるほどと少し不良の気持ちも理解できた。

白のワンピースを着たその女性はとても華やかで艶やかな黒髪が腰まで伸びており、真っ白な透き通るような肌がとても眩しかった。少し見とれていると「あの」という問いに我に返り、返事をした。

「いえ、大丈夫ですか。怪我とか」

「はい、私はなんともありません。お兄さんはお怪我は」

「俺も大丈夫ですよ、気をつけてくださいね。それじゃあ」そういい残し逃げるようにその場を後にした。今考えたら勿体無いくらいの美人だった。名前くらいは聞いておけばよかったかもしれない。

約束の十九時を十分前になったところで槍介は店に着いた。ボーイに指名は、と聞かれ桃華と答えた。槍介はそのとき初めて気づいた。そういえば今日もし恋華が店にいたら気まずい雰囲気になって

しまうのではないだろうか。
店内に案内されるとき槍介はずっと俯いて歩いた。しかし、その努力も空しくふと視線の感じる方向に目をやると恋華がこちらに気づき、槍介を見ていた。恋華の対応している客が稜太ではないかと一瞬肝を冷やしたがその心配はなかった。恋華は槍介が指名したのは自分ではないことを知っているのか少し不機嫌そうな顔をしているように見える。
槍介は平静を装って視線を前に戻した。開き直ることにしたのだ。
席につき、桃華が来るまで待っている間もやはり恋華の視線が気になった。槍介はボーイが持ってきてくれたビールをいつもより早いペースで飲んだ。
しばらくすると誰かが近づいてくる気配を感じた。槍介は一瞬恋華が近づいてきたのかと思った。
「おまたせ～、本当にきてくれたんだね～」その声を聞いて槍介は胸を撫で下ろした。
「暇だったからね。あと桃華ちゃんの名前が知りたかったから」
桃華は最初何のことなのか理解できなかったようだが、前回槍介が初めてこの店に来たときに今度会いにきてくれたら本名を教えてあげると言っていたことを思い出した。
「ああ、そんなに知りたかったの～。じゃあ教えてあげてもいいけど」と言った次の瞬間、店内がざわついた。槍介はなんだと一瞬戸惑い、桃華に説明を求めようと桃華の方を見た。
「これなんの騒ぎなの。てか何で立ってんの」見ると桃華だけではなく店内のキャバ嬢全員が姿勢を整えて店の入り口を見据えていた。その姿勢のまま桃華が口を開いた。
「この店のナンバーワンがご出勤よ」
言われて今度は視線を入り口に向けると槍介は目を全開にした。
「あ、あの人」槍介の態度に今度は桃華が聞いてきた。
「聖羅さんを知ってるの」
槍介はその問いに声を出さずに頷いた。知っているもなにもその

人は槍介が昼間助けた超美人のことだった。
「あの人、キャバ嬢だったんだ」槍介は女性がわからなくなってきた。昼間会ったあの人は確かに美人ではあったが、今のような神々しいオーラはなかった。白のドレスがとてもよく似合い、ティアラが王冠のように輝き、後光が差して見えた。
まるで王妃が入室してきたかのようにキャバ嬢たちは聖羅さんを迎え入れた。槍介があまりにも視線を釘付けにしすぎたのかそれを感じ取ったかのように彼女はこちらを向いた。そして槍介の存在に気づくとこちらに向かい歩を進めた。
「先程はありがとうございました。私あのような方達との上手な接し方を知らなかったもので、とても助かりましたわ」と笑顔で一礼し、ではと言って指名客であろう人の方に歩き出した。その人も品性と知性に溢れるナイスガイだった。
「聖羅さんんとはどういう関係なの」桃華が怪訝そうな表情で聞いてきた。
「対したことじゃないよ、ちょっと街で絡まれてたのを助けただけ」
桃華はふうんとだけ呟き、着席した。

桃華との話は尽きず一時間という時間では話しきれなかった。危うく延長するところだったが家に帰るタクシー代を使うわけにはいかず、今日はこれで帰ることにした。
帰りのタクシーの中で槍介は桃華の名前を聞くことを忘れていたことを思い出したがもうどうでもよくなってきた。そもそも教えたくないから源氏名というものを使っているのかもと考え、聞くつもりもなくなっていた。それよりまた会って話がしたい、自分は酒を飲んで酔っているし、彼女はキャバ嬢ということで話のレパートリーが普通の人より多いだけかもしれないが槍介にとって桃華といる時間はとても楽しかった。
タクシーの中で暇だったので特に用もなく携帯を開くとメールが二件着ていた。開くと一件は桃華からだった。

『今日は楽しかったよ。また遊びにきてね～』返事は後にすることにしてもう一件のメールを開いた。送信者は宗彦だった。
『よう、久しぶりだな。元気か、多分だけどあんまり元気じゃないんじゃないか？稜太との話、少しだけ聞いたぞ。多分お前のことだから悪気があったわけじゃないんだろ？俺に任せとけよ、また仲良しの三人で合コンしような』と打ち込まれていた。
槍介は携帯を強く握り締め声をひそめながら涙を流した。自分にはまだ宗彦がいる、そしてその親友のおかげでもう一人の親友とも仲直りできるかもしれない。そう思うと涙が止まらなかった。自分一人の無力さを痛感しながら宗彦に『ありがとう』とだけ打ち込み送信した。
「あの～」
槍介がタクシーから降り、自宅に着いて自分の部屋の鍵を開けている時、不意に隣から誰かに声を掛けられた。声のしたほうに目を向けるがその人物に槍介は面識がなかった。
「私、今日から隣に引っ越してきました。増原美香といいます。よろしくお願いします」
「あっ、どうも九条槍介です」
お互いが自己紹介をし、ほぼ同時だった。
「えっ」
槍介はその名前に聞き覚えがあった。そして、相手の増原美香もその反応からすると自分の名前を聞いたことがあるのだろう。いや、もし間違いでなければ聞いたことがあるどころではないその子は・・・。
「美香」
「槍介」
槍介が高校生の時に付き合っていた元彼女だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2148s/

プライスラブ

2011年5月11日00時55分発行